

えひめの歴史文化モノ語り

県歴博収蔵資料から ⑩

わが国における黒い色をした土器の誕生は、縄文時代後期にさかのぼる。九州で、土器の表裏に炭素(煤)を付着・吸収させて仕上げた黒色磨研(こくしよくまけん)土器が製作された。黒は夜や暗闇を象徴する色でもある。

して、黒色土器(内黒土器)と呼ばれる器の内側だけを黒く燻(いぶ)した高台のない坏が定量生産されるようになる。内側を燻し焼きにした理由は保水性をもたせるための工夫とされており、やがて全体を黒くし器形も高台付きの坏や碗が主流となっていた。

ている。しかし、このテーマを補うかのようにつ、器面の磨きを丁寧に行い、光沢が出るよう仕上げている。中世の村落と考えられている松環古照(まつかんど)遺跡(松山市南江戸)からは、11世紀後半から12世紀の土師器碗が多く出土したが、13世紀半ば以降のものはみられない。一方、それに代わるように12世紀後半から13世紀前半の瓦器碗(和泉型瓦器碗)が豊富に出土しており、大阪府中南部で生産されたものが、当地に搬入されたと考えられる。

粗造を補う光沢仕上げ

黒い土器 瓦器碗



松環古照遺跡出土の瓦器碗(中央一口径15.6㍍、器高5.2㍍、13世紀、県教育委員会蔵、県歴史博物館保管)。テーマ展「似ている、ちがう?—出土品から歴史を考える—」で4月7日まで展示中

り、西日本を中心に流通した。瓦器も黒色土器と同じく素焼きの土器を燻したものである。器形は平安時代の間に底部が広い坏から小さな碗の形に変わっていき、規格性をもった碗と皿の組み合わせが確立する。瓦器碗は、須恵器(すえき)より軟質で素地に隙間が多く、焼き締めがあまり良くない。このことから薪を節約して短時間で焼成した粗悪な焼き物と考えられ

る。瓦器碗は13世紀後半には、高台が形骸化し、やがて消失するが、本資料は高台がなくなる直前の時期のものである。金属器・漆器等の高級食器に似た光沢をもちつつ、安価で大量生産された瓦器碗は、人々の目をひきつけ、およそ300年間で役目を終えたのである。(専門学芸員・亀井英希) < 随時掲載します >